平等院の伽藍とその性格

清　水　　擴*

A Study on "Hōōdō"

Hiroshi SHIMIZU

"Byōdō-in Hōōdō" is one of the most eminent architectures in Heian era. The form of "Hōōdō" is very peculiar and unprecedented. I think the reason of the creation of the form is as follows.

"Hōōdō" was constructed as the three-dimensional form of "Jōdo-Hensōzu", the picture describing Buddhist Heaven. This matter is proved by the fact that "Kogosho" was built in front of "Hōōdō" to worship it, and such facility was very unique. By the way, "Jōdo-Hensōzu" were imported from China, and in the scenes of several "Hensōzu", architectures which have strong resemblance to the composition of "Hōōdō" are described.

平等院阿弥陀堂（通称・鳳凰堂）は藤原摂関家の栄華を今に伝える唯一の建築遺構であり，また浄土教芸術の最も優れた遺品でもある．しかし道長によって造営された法成寺に比較すれば遙かに規模は小さく，また『栄花物語』などの文学作品においても，法成寺に対する熱のこもった描写に比して，平等院についてはほとんど触れられていないことから，平等院は芸術的あるいは建築的価値において法成寺に一歩譲るものと評されがちであった．しかし両者を比較した場合，同じ浄土教建築ではあってもその存在形態には対照的な相違点があり，その優劣を論じることにはさほどの意味を見出せない．本稿では平等院の持つ独自性について，特に法成寺と対比させながら論じてみたい．

第1節　頼通時代の平等院

平等院の前身である宇治別業は，頼通が父・道長より伝領したもので，永承7年（1052）3月にこれを仏閣に改め，平等院と号したことは周知の事実である．そしてその年に本堂の供養を行い，阿弥陀堂（現存する鳳凰堂）の供養は遅れて天喜元年（1053）3月にとり行われた．

頼通の存命中にできた建築は本堂・阿弥陀堂のほか，天喜4年（1056）の法華堂，康平4年（1061）の多宝塔，治暦2年（1066）の五大堂，延久5年（1073）の不動堂などである．ほかに経蔵が治暦3年（1067）以前に建てられ，特異な存在である小御所は寛治元年（1087）にはすでに建てられていたことが確認されるが，頼通在世中に造られたという確証はない．平等院伽藍の復原については杉山信三博士の『藤原氏の氏寺とその院家』，平等院の経蔵・小御所については福山敏男博士の「平等院の経蔵と納和歌集記」，「宇治平等院の小御所」に詳しく論じられている．したがってここでは平等院のひとつの特色を構成する本堂建築群の復原を中心に述べ，全伽藍の復原については多少の補足を加えるにとどめたい．

* 建築学科助教授
昭和60年9月25日受理

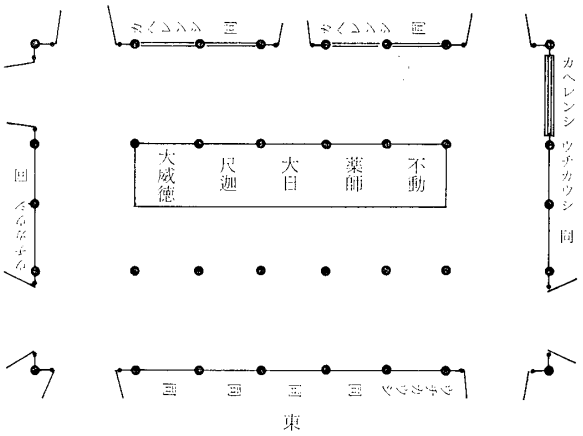

図 1　平等院本堂指図（『門葉記』）

（1）　本堂と御所

永承 7 年 (1052) 3 月 28 日に供養の行われた本堂は五間四面の東向御堂で，大日如来を本尊としていた[1]．両脇の薬師・釈迦・大威徳は定朝の作，不動は父・康尚の作であったという[2]．平等院本堂については『門葉記』「熾盛光法・二」にその指図が載せられている（図 1）．この図は建仁 4 年 (1204) 2 月 8 日の，本堂における大熾盛光法執行の時の道場図であり，当初の建築である確証はないが，堂の規模・安置仏は創建堂と同じである．少くとも旧規を踏襲しているとみてよいであろう．この堂の前面は両脇間を除いて蔀戸であり，住宅風の意匠を見せている．ところで，頼通在世中の御所としては延久 2 年 (1070) 6 月に安鎮法の修せられた御所が確認されるのみである．『阿娑縛抄』「安鎮法日記集」によれば「平等院西新卜御所」とあり，西側は阿弥陀堂の背後にあたるから同一境内ではなく，平等院とは別郭をもって造営されたものと考えられる．したがって頼通の時代には平等院内に御所の存在は確認できない．

時代は下るが『中右記』長治元年 (1104) 3 月 3 日の条，および『永昌記』天永元年 (1110) 3 月 3 日の条には「本堂御所」の名がみえる．これは『中右記』元永元年 (1118) 閏 9 月 21 日の条に「御堂御所是本堂西面御所也」とあるのと同一物とみられ，後述するように本堂に付属する「西廊」ではなかったかと思われる．同日の条によれば十種供養の僧侶の集会所には「本堂川辺透廊」があてられており[3]，これも後述するように釣殿へ通ずる廊ではなかったかと推測される．

『中右記』長承元年 (1132) 9 月 24 日の条には，鳥羽上皇の平等院御幸について次のように記している．

寄御車於本堂廊北階‥‥御覧本堂并懺法堂，
寄御車於懺法堂東階，経池辺，
寄御車於阿弥陀堂西廊‥‥本堂廊居上達部饗十五前，其北廊居殿上人饗二十前

これにより，本堂の南に懺法堂があり，両堂は廊でつながれていたらしいことがわかる．上達部の饗膳の据えられた「本堂廊」がこれにあたり，殿上人饗座の「其北廊」は本堂北廊，つまり上皇の御車の寄せられた廊であろう．そして懺法堂には「東階」があったから，東向であったと思われる．

続いて長承 3 年 (1134) 5 月 13 日にも上皇の平等院御幸があった．『長秋記』同日の条は

下官自是騎馬，渡橋入自大門，至北廊南妻，前大相国，新大納言被候此所，御車同入自大門，‥‥上皇先令礼本堂，次令礼懺法堂給，次礼持仏堂給，

と記している．「北廊南妻」は「北廊北妻」の誤りであろう．前に引用した『中右記』には「本堂廊北階」とあるから，廊への昇降口は北妻にあったはずである．そして北から本堂，懺法堂，持仏堂の順にならんでいたことがわかる．

仁平 2 年 (1152) 2 月 2 日，故頼通の忌日法会が平等院で行われた．『兵範記』同日の条の記述は次のとおりである．

本堂南御懺法堂南面等身阿弥陀三尊前供香花仏供灯明，仏□□ 南庇中戸西仏前也，御仏在母屋，聖霊御在生之時御念誦堂云々，立導師礼盤前机等，南庇中戸以東，更折北，敷紫縁畳六枚，為題名僧‥‥東弘庇敷円帖三枚，為布施取座 南上西面 本堂南簀子寄西敷同帖二枚，為本寺三綱座 西上南面 ‥‥下官等着弘庇座，

これによれば頼通在世中の念誦堂は懺法堂の内部

に設けられ，母屋の南の間に南面して，等身阿弥陀三尊が安置されていたことが明らかである．つまり前記の「持仏堂」は「念誦堂」とも呼ばれ，独立した建築ではなかったのである．そして持仏堂を含む懺法堂は三間四面，西広庇つきの規模で，また三綱座が本堂南簀子の西寄に設けられていたから，両堂をつなぐ廊は東に寄せて造られていたと推測される．

保元3年（1158）10月17日の後白河法皇の平等院御幸は舟によって宇治川を渡り，直接平等院に横づけされた．これに先だって舟を接岸するための準備がなされたが，『兵範記』同日の条によれば，この時の様子は次のようであった．

釣殿前，自石橋下，経小島上，臨河畔，新構
鍄台，為船寄重々左右造高欄階，舟艦五艘相艤西岸，

やがて法皇の船が到着し，関白基実がこれを迎えた．

上皇御船寄此岸之間，殿下令下釣殿南頭給，
上皇移釣台御座本堂仏前，殿下令候東簀子給，
中納言以下，被候北弘庇，殿上人候北廊

つまり宇治川に面して釣殿（釣台）があり，その付近には川の中洲へ渡る石橋が懸けられていたのである．現在の橘島がもっと右岸寄りにあったのかも知れない．そしてこの釣殿と本堂とを結ぶのが前に引用した「本堂川辺透廊」ではなかったかと思われる．

嘉応2年（1170）4月19日，後白河法皇は受戒のため東大寺へ向かう途次，平等院へ立ち寄られた．『兵範記』同日の条によれば，この時の公卿座は「北子午廊」，殿上人座は「西卯酉廊」であった．この卯酉廊，つまり本堂西廊には「馬道」があけられ，また「南庇」があったから，かなり規模の大きいものであった．

以上によって復原される本堂建築群は（図2）のようになる．このように平等院本堂には三方に廊が付属し，さらに宇治川に面しては釣台が設け

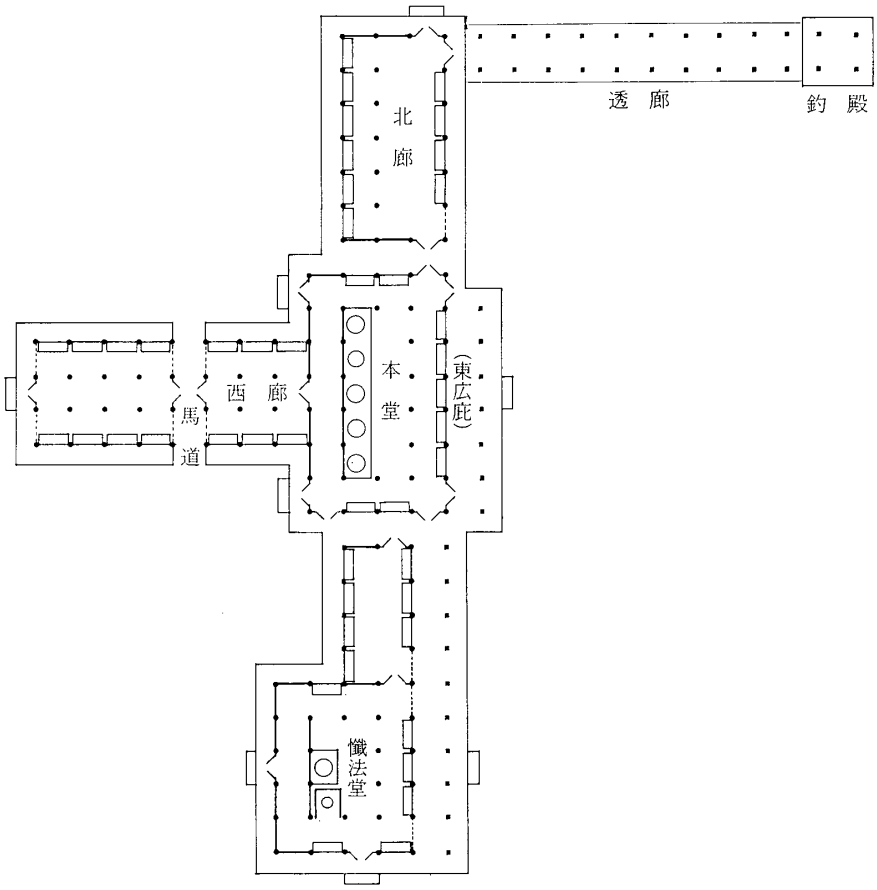

図2 平等院本堂建築群復原図

られていた．そしてこれらの廊が天皇・上皇の行幸の都度，「御所」として使用されている．つまり平等院の伽藍内には独立した御所は造られず，本堂建築群がそれにあてられていたのである[4]．

『門葉記』の建仁4年(1204)の本堂指図が住宅的な構成を見せていることは前述した．そして本堂を中心とする建築群もきわめて住宅的であり，御所として頻繁に使用されていたことを併せ考えるならば，あるいは平等院本堂は別業時代の寝殿を改めて仏堂に転用したという推測も十分に成り立ち得るであろう．

次に，平等院に特異な存在である小御所について，福山敏男博士の論文に拠りながらその概略を述べてみたい．

小御所は池の東岸，つまり阿弥陀堂と向き合う位置に建てられていた．この建物の西面，つまり池に面する側は妻戸で，その前には縁が設けられていた．内部には塗蔵（塗籠のことか）があり，建治2年(1276)の頃には頼通の時の倚子などの調度品や鳩杖などが納められていたという．「小御所」とはいうものの，ある程度の規模を有していたことを推測させる．この建物は池の対岸の阿弥陀堂を，そして定朝作の阿弥陀仏像を拝するために建てられたものらしく，宿所として使用された形跡はない．御所としてはきわめて異例なものであった．

（2）　伽藍の復原

平等院伽藍の全体的復原は，杉山信三博士の案によって大過ないものと思われる．これに若干の補足を加えればつぎの点があげられる．

①五大堂の位置は仁平3年(1153)3月3日の『兵範記』に，本堂より経蔵付属の桟敷へ向かう道を

其道添池辺，経阿弥陀堂北廊北，自山路経円堂南五大堂後依不可経堂前，不令直行給也自西大門方更東行

とあり，五大堂の前を通るべきでないので，わ

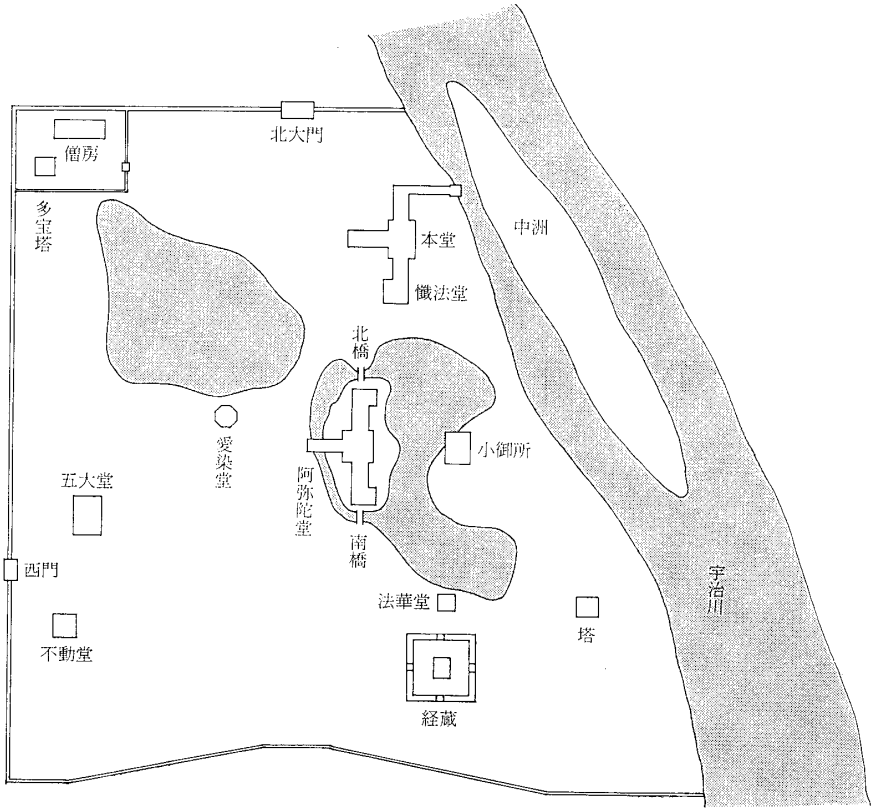

図3　平等院伽藍復原図

ざわざ遠まわりをして西大門方へ行き，そこから東行した旨を記している．これは五大堂が西大門の近辺にあり，しかも東向きでなければこのような措置は考えられない．したがって五大堂は西大門の近く，やや北寄りにあったと考えるべきであろう．

②『山槐記』治承3年（1179）3月3日の一切経会の指図で，経蔵の南方に小さく描かれた建物は指摘のように法華堂であったと思われる[5]．

③経蔵は正面三間以上で，母屋と庇に分かれていた．周囲には回廊をめぐらし，東に中門，西・南・北にも門を開くという規模の大きいものであった．この経蔵は一切経をはじめとして，種々の宝物類をも収蔵する「宝蔵」であった．そのため，方一尺の欅材をならべて床としたように，きわめて堅牢な構造を持っていたようである．

第2節　伽藍と建築構成の特色

（1）　伽藍の構成

平等院は摂関時代を代表する建築として，また浄土をこの世に出現させたものとして，道長の法成寺とつねに対比されるところである．法成寺は『栄花物語』に「御堂あまたにならせ給ままに，浄土はかくこそはと見えたり」と評され，平等院は『続本朝往生伝』に「極楽いぶかしくば宇治の御寺を礼へ」と書きとどめられたように，いずれも地上における極楽浄土の顕現を意図したものと受けとられていた．しかし両者を比較する時，その構成のあり方は大きく相違していることも事実である．ここでは法成寺との対比の形で，平等院の構成の特色についてふれてみたい．

平等院の営まれた宇治は古来から景勝の地として著名であり，貴族達の別業も多く建てられていた．そして南都と平安京を結ぶ要衝の地でもあり，宇治川に懸けられた宇治橋は交通上の重要な施設であった．平等院はこの宇治川に臨み，宇治橋の南側に位置する．そして本堂，阿弥陀堂の敷地は平坦だが，その背後，つまり南と西はやや小高くなっており，往時は宇治川の清らかな流れと緑の木立に包まれるような地形に立地していた[6]．平等院は穏やかで美しい自然を背景として営まれたのである．一方の法成寺は大土木工事によって池を穿ち山を畳んで「人工の自然」を造りあげ，その自然を取り囲む形で諸堂が配置されており，いわば「閉ざされた中庭」に集約的に造化の美を実現しようとしていた．平等院が自然に抱かれる形で立地するのに対し，法成寺は自然を抱き込む形をとり，また平等院が宇治川の対岸や宇治橋からも望見できる開放的な伽藍であったのに対し，法成寺がきわめて閉鎖的であった点も大きく相違する．

池との関係も両者は対照的である．法成寺は建築が池を取り囲むが，平等院では池が建築（阿弥陀堂）を取り囲んでいる．つまり池の中島に阿弥陀堂は位置するのである．法成寺的な池水の扱いは寝殿造庭園の延長上に考えられることであるが，中島に仏堂を造るという発想にはそこから一段の飛躍が必要であった．

つぎに伽藍の構成について比較してみる．法成寺の場合は大規模な仏堂が林立し，それらがまさしく輪奐の美を競っていたのであり，阿弥陀堂はその中のひとつの仏堂にすぎなかった．形態や荘厳の面でもぬきんでる存在ではなかったようであるし，むしろ規模や内容からみて，中心建築である金堂が諸堂に君臨していたはずである．浄土教伽藍とはいっても，結果的には必ずしも阿弥陀堂が中心にはなっていないこと，そして個々の仏堂の内容もさることながら，群として圧倒的な量感をともなう美を誇っていたことが，この寺の大きな特徴である．これに対して平等院の場合はあくまでも阿弥陀堂が伽藍の中心であり，本堂ですら二義的な存在にすぎなかった．そして他の諸堂も，多くは背後の木立の中にひっそりとたたずみ，寺院景観の主役である阿弥陀堂と競合しないような配慮がなされていたと想像されるのである．したがって当然のことながら諸堂は独立した存在であり，法成寺のように居所としても使用で

きるような廊をともなう仏堂は，御所として使用された本堂のみであった．そして阿弥陀堂は芸術品としての価値を損なうおそれのある一切の付属施設を排除して，完全自立の姿でその優美なたたずまいを誇っていたのである．

以上のように法成寺と平等院はその造形的表現法において，きわめて対照的な存在であったとみなすことができるだろう．そして浄土教建築という観点からすれば法成寺は不徹底であり，平等院においてはじめて，阿弥陀堂を中核とする本格的な浄土式伽藍が実現されたとみてよいであろう．

（2） 鳳凰堂の構想とその起源

前述したように，平等院における小御所の存在はきわめて特異であり，建築史上における鳳凰堂の位置を考える上でも重要な手がかりを提供している．

小御所は阿弥陀堂と向きあう形で池辺に建てられ，しかも一般の御所のように宿泊の用に供された例が知られていない以上，特殊な目的をもって造営されたものと考えざるを得ない．それは阿弥陀堂正面中央間の格子に穿たれた丸い開口を通して，遙か池の対岸より阿弥陀の尊顔を拝することであったとも考えられるが，それならば堂内に入ることによって，より直接的にその目的を達することができたはずである．したがって小御所は，阿弥陀仏を拝するよりは，むしろ阿弥陀堂そのものを礼拝し，極楽世界を観ずる目的のためにあった，と考える方が妥当であろう．

美しい建築はいつの時代にも求められるものではあったが，それを鑑賞するための専用建築が設けられたのは，おそらくこの平等院がはじめてであっただろう．ではこの小御所は浄土教的視点からはどのように位置づけられるだろうか．その前に，鳳凰堂のあの独得の形態はどこにその起源を有するかについて，少し考えてみたい．現在までのところ，鳳凰堂のデザイン・ソースとして，次の3つが比定されている．

①平安宮の大極殿の一郭，および中和院神嘉殿などの官庁建築．

②寝殿造の配置法，あるいは神泉苑の形態．

③観経変相図等の浄土変相図に描かれた建築．

これらはいずれも主建築から左右にのびる翼廊，およびその先端に配される楼閣に着目したもので，たしかにこの二大要素は①②のような既存の建築の中にも認められる．しかし鳳凰堂の場合，その最大の特徴は翼廊そのものが楼造となり，下層が吹放しとなっていることであり，これを既存の建築に見出すのは困難である．

作成年代が鳳凰堂より遡る浄土変相図は数少いが，その中で「浄土の三曼荼羅」と称される智光曼荼羅，当麻曼荼羅，清海曼荼羅は特に著名である．前二者の原図は奈良時代に遡り，特に当麻曼荼羅はその図様や，そこに描かれた建築の様式から，中国からの将来品であった可能性が強いとされている[7]．ただ，そこに描かれた浄土の建築群はきわめて空想的で，現実性に乏しい．

清海曼荼羅は沙門清海が清水寺観音の援助によって感得したといわれるもので，長徳2年（996）10月25日の年記がある．原図は伝わらないが，聖光寺（京都），成覚寺（宮城），浄土寺（尾道）に伝わる写本はいずれも酷似していて，原図を良く伝えていると考えられる．この図で注目すべきは，中央主建築の両脇に配置された建築が，翼廊ではないが楼造りとなっており，上層間が太鼓橋によって結ばれている点である．浄土変相図に登場する多くの二層建築は大半が重層であり，このような楼造りの例は珍しく，年代的にも平等院鳳凰堂との連関を感じさせる．

清海曼荼羅の建築の細部には，明らかに人字形割束と思われるものが看取され，この図がわが国で考案されたものではなく，中国からの舶載品を写すか，あるいは参考にして作成されたことを示している．つまり，この時期までに相当数の浄土変相図が中国からわが国にもたらされていたことも考えられるのである．そこで翻って，中国におけるこの主の図に注目してみたい．

敦煌・莫高窟には初唐から晩唐にかけて描かれた浄土変相図が十数点存在する．この内，阿弥陀

浄土変としては観経変相図と思われるものが8点確認されている．他は薬師浄土変とみられている．これらの図に描かれた宮殿建築には翼廊・楼閣を有するものが多く，しかも左右の翼廊は前方に折れ，その屈折点や翼廊前端に楼閣を置くものも多くみられる．中でも注目すべきは，翼廊を二階造とするものが数点確認される点である．これらの建築と鳳凰堂との相違は，前者が楼閣を円形や八角形とするのに対し，後者では方形平面とすること，前者では翼廊の下部を袴腰とするのに対し，後者はこれを吹放しとすることなどであるが，こうした違いは中国と日本の好みの差に起因するものと考えられ，基本的な構成についてはほぼ一致するとみなすことができよう．

この種の変相図がわが国に将来されたという確証はないが，清海曼荼羅の例に照らせば，可能性は十分に存在すると考えられる．

平等院鳳凰堂がこれらの図をそのまま立体化したものでないことは当然であるが，少くとも全体の建築構成に関しては多くの示唆を受けたのではないかと想像されるのである．

敦煌・莫高窟に描かれた浄土変相図にせよ，わが国で描かれたそれにせよ，これらはいずれも浄土を想い，浄土を願求するための，いわゆる観想の助縁として使用される目的を持っていた．浄土変相図に対座し，ひたすら浄土を観想するのである．

平等院の小御所は鳳凰堂と対座するための施設であったことは前述した．それは勿論，観賞のためではなく観想のためであって，あたかも浄土変相図を礼拝するがごとく，礼拝者はこの御所において鳳凰堂と対座したのである．とするならば，鳳凰堂自体が実は立体化された浄土曼荼羅であったとも考えられるのである．

元永元年(1118) 閏 9 月 21 日，太皇太后寛子は平等院阿弥陀堂に十種供養を行った．太后は小御所においてこれに臨んだが，その時の池辺のしつらいについて『中右記』は次のように記している．

前池作蓮花水鳥樹林洲鶴砂鴿作立之，或桜花，或紅葉，水中岸上既無其隙，

これはまさしく浄土曼荼羅の「極楽の宝池」を平等院に演出しようとするものであった．このように前池を荘厳することによって，さらに効果的に極楽世界を演出し，小御所からその極楽世界を遙拝することが実際に行われていたのである．

浄土変相図に描かれた建築と，平等院鳳凰堂との構成上の類似は，けだし，その目的から導きだされた当然の結果であったといえよう．

（3） 鳳凰堂の荘厳

堂内の荘厳については，法成寺阿弥陀堂との比較のために，必要最少限の事項について略述するにとどめる．なお現状で窺い知れない部分については福山敏男博士の『平等院図鑑』によることとする．

①堂内の壁および扉には九品往生図および日想観が描かれている．これらの図は当代の能書家・源兼行の色紙形を有する大和絵風の仏画で，法成寺の扉絵の系統に属するものであり，宮廷画家の手になったものらしい．

②堂内は全面的に彩色され，緑色および青色を基調としていた．宝相華文を主とし，構造部には幾何学的模様を，非構造部には自在画的模様を施していた．現在，白漆喰塗りとなっている長押上の小壁にも，もとは彩画が施されていた．

③柱は帯模様によって内法長押下を4区に分け，幾何学的な宝相華を描いている．ただし下から第3区のみは，唐草模様の中に天衣を翻して舞う天人，坐して楽を奏する天人，飛び立つ鳳凰を描いている．

④格子（犬防ぎ）は内面の組子の辻ひとつおきに螺鈿が篏入されていた．これは法成寺の阿弥陀堂に共通する．

⑤長押上の小壁には 52 体の木彫菩薩，飛天がとりつけられている．これらはいずれも彩色されあるいは金箔が押されていた．これは法成寺金堂の「諸天雲に乗りて遊戯」に通ずる．

⑥本尊阿弥陀の大天蓋には宝相華模様の螺鈿が篏

め込まれており，また須彌壇にもかつては螺鈿が施されていた．これは法成寺東北院の「沈，紫檀を高欄にし，蒔絵，螺鈿，櫛の筥などの様にせさせ給へり」とあるものにつぐ，仏堂内の螺鈿使用の例である．

以上のように，平等院鳳凰堂の荘厳は，道長の法成寺の諸堂の中で試みられた様々な手法をすべて採り入れており，まさしく摂関時代の建築・装飾手法の集大成であったと言っても過言ではないだろう．

〔註〕

1) 『伊呂波字類抄』
2) 『長秋記』長承3年5月 13 日の条．仏師院覚の目ききによれば，不動尊は「高成」の作であるという．高成は康尚であろう．
3) 『中右記』長承2年5月8日の条にも，宇治鎮守明神離宮祭を「平等院透廊」に見物したとある．
4) 『玉葉』文治 3 年 (1187) 8 月 21 日の条によれば，九条兼実はこの日初めて，氏長者として平等院に詣でた．この時の様子を同記は次のように記している．

寄船於釣殿下，自船経釣殿，并経本堂東広庇北縁，并東念仏堂東縁等，入自北廊西面遣戸内府相具之小時着饌‥‥次参本堂経念仏堂東縁，并経本堂西庇等，着正面西間座内府同着西第一間畳‥‥正面東間敷畳一枚，為長吏座‥‥近習殿上人等，候西念仏堂南広庇辺，

この文のとおりに解釈すると，建物の配置状況の復原すら不可能である．しかし，これを兼実が本堂は南面するものと勘違いしたと考えれば問題は氷解し，前掲の復原図と矛盾しない．ただ，文中の「西念仏堂」は懺法堂であるとして，「東念仏堂」の存在はこれまで確認できなかった．本堂の背後（西），西廊（文中の北廊）との間に位置したようであるから，あるいは西廊の馬道以東が，念仏堂として使用されるようになったのかも知れない．

5) 福山敏男博士はこれを五大堂に比定しておられる．
6) 本堂から経蔵へ至る道は二本あり，阿弥陀堂の前を通るのを「野路」，阿弥陀堂の背後を通るのを「山路」と表現するのもこれを裏づけよう．
7) 岡崎譲治『浄土教画』(「日本の美術」43)，鈴木嘉吉「浄土教絵画に表れた仏殿」(『浄土教美術の展開』所収)